

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

大学

企画課管理用 社 — A — 2

| | |
|------|----------|
| 推進主体 | 国際センター |
| 責任者 | 国際センター所長 |

| 分類 | 実施計画 | 開始年度 | 完了年度 | 将来的な継続 |
|-------|-------------------------------|---------|---------|--------|
| 社 — A | ②文理横断型の新たな社会基盤の整備に向けた教育・研究の促進 | 令和 4 年度 | 令和 9 年度 | あり(予定) |

① 目的・内容

本学は、文部科学省からの助成を受けて私立大学研究ブランディング事業「超高齢化社会への新たなチャレンジ」を成功させた実績を持つ。事業の制度は令和元年度までに終了し、その後、学校長裁量枠による支援により継続している。今後も引き続いて学習院大学が次世代の先端研究を主導することを目指し、我が国あるいは世界での研究における学習院ブランドをより一層確かなものとすることを目指し本事業の申請を行う。

これまで生命科学の急速な進展に伴って生じる社会的諸問題とその対応について、文理連携による新たな学際領域「生命社会学」を創成し、来るべき少子高齢化を伴う超高齢社会への対応可能な社会基盤の整備に向けた様々な提言を行ってきた。

国際センター及び学長室研究支援センターでは、この事業を継承しつつ、文理連携における学問的な連携や融合に関して生命社会学の概念を打ち出す具体的な研究課題を提起し、その実行に向けた事業を支援する取り組みを行う。なお、実施する事業については、文科省補助金等、外部資金への応募、企業との共同研究も視野に入れつつ支援を行う。

② 到達目標(数値目標/定性目標) ※数値目標を設定できない計画は、定性目標を設定すること。

令和3年度の時点で、文理横断型の教育研究事業についての支援体制は十分とはいえない状況であるため、令和6年度までに国際センター及び学長室研究支援センターが文理連携による新たな学際領域「生命社会学」の事業(生命社会学I、II講義、及び年2回の生命社会学シンポジウム)を継承しつつ支援体制を確立する。また、令和9年度までに文理連携における学問的な連携や融合した生命社会学の具体的な研究課題を提起し、その実行に向けた事業を支援する。

③ ロードマップ

| 年度 | 令和3年度 (2021年度) | 令和4年度 (2022年度) | 令和5年度 (2023年度) | 令和6年度 (2024年度) | 令和7年度 (2025年度) | 令和8年度 (2026年度) | 令和9年度 (2027年度) |
|----|-------------------|-------------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 予定 | 次年度予算申請 | 国際センター・学長室研究支援センターによる支援 | | | | | |
| | 支援体制の整備 | | | | | | |

④ 数値目標の詳細 ※設定できない計画については記載不要。

| 指標の名称 | | 指標の定義(計算式/説明) | | | | | |
|-------|----|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1 | 直近 | 令和4年度 (2022年度) | 令和5年度 (2023年度) | 令和6年度 (2024年度) | 令和7年度 (2025年度) | 令和8年度 (2026年度) | 令和9年度 (2027年度) |
| 目標 | | | | | | | |
| 実績 | | | | | | | |

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

| ⑤ 実施計画／実施報告 | | |
|-------------|---|---|
| 年度 | 実施計画 | 実施報告／今後の課題 |
| (2022年度) | <p>令和3年度に査定された予算に基づき、文理横断型の教育研究事業の支援を行う。</p> <p>また、各学部等に対し、次年度以降の文理横断型の教育研究事業について募集し予算を確保する。</p> <p>なお、本事業に係る予算の申請・執行については、研究支援センターが担当し、本事業に係るシンポジウム開催及びHP等による社会への情報発信については、国際センターが担当する。</p> | <p>本年度、生命社会学I、IIの講義を遠隔授業により行い、受講者は総数41名(文学部8名、経済学部3名、国際社会科学部1名、法学部3名、理学部26名)、文系理系学生の活発な議論が行われた。また、シンポジウム超高齢社会を考えるVI<基礎・臨床・大規模データから迫る病気の正体)には、関東以外からの参加者を含め96名が参加した。教育研究事業について文理の教員、寄付講座教員、研究員でテーマを決定し実行した。2回目のシンポジウムは「筋活で伸ばす健康寿命」をテーマとして12月に開催する。シンポジウム開催支援及びHP等による社会への情報発信については、国際センターが、予算の執行については研究支援センターがそれぞれ担当しており、支援体制の基本的な整備は終了した。</p> <p>なお文理連携における学問的連携や融合は未だ一部教員に限られており、研究を中心にした教員同士の交流を拡大する必要がある。</p> <p>★進捗段階:「意思決定」</p> |
| (2023年度) | <p>令和4年度に査定された予算に基づき、文理横断型の教育研究事業の支援を行う。また、次年度以降の文理連携、融合をさらに推進するために各学部等からなる委員会を設置する。</p> <p>なお、確立された支援体制に則り、本事業の実施に係る予算の申請・執行については、研究支援センターが、またシンポジウム開催支援及びHP等による社会への情報発信については、国際センターが担当する。</p> | <p>本年度、生命社会学I、IIの講義を遠隔授業により行い、受講者は総数【生命社会学 I】50名(法学部4名、経済学部1名、文学部7名、理学部35名、国際社会科学部3名)、【生命社会学 II】57名(法学部6名、文学部6名、理学部41名、国際社会科学部4名)が受講し、文系理系学生の活発な議論が行われた。これら2教科は基礎教養科目として定着している。また、シンポジウムでは今年度は少子化をメインのテーマとして6月開催「少子化対策と生殖医療」、10月開催「人間と生態系のサステナビリティ」について会場と遠隔の同時配信によって開催した。関東以外からの参加者を含めそれぞれ106名、93名が参加し質疑応答時間を超える活発な議論が行われた。なお、10月のシンポジウムに向けて、本事業用の同時配信機器を一部購入するなど、今後も継続的に全国に配信する準備を整えた。シンポジウムのテーマを決めるための会議を4回開催し、文理の教員、寄付講座教員、研究員を交え現在の社会問題について議論を行い、今年度のテーマを決定し実行した。新しい教員の講義、シンポジウムへの参加を促進し、教員間の更なる連携と融合を拡大していきたいと考えている。なお、これまでのシンポジウムをまとめた叢書「生命科学と社会問題の多面的議論」を出版準備中である。</p> <p>シンポジウム開催支援及びHP等による社会への情報発信については、国際センターが、予算の執行については研究支援センターがそれぞれ担当し、プロジェクトの支援体制は十分に整い、講義、シンポジウム活動を通じて生命社会学が本学に定着しつつある。</p> <p>★進捗段階:「実施展開」</p> |

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

| | | |
|-----------------------------|--|---|
| <p>(2024年度) 令和6年度</p> | <p>令和5年度に査定された予算に基づき、文理横断型の教育研究事業の支援を行う。また、文理連携、融合をさらに推進するため新たに講義、シンポジウムに関心を持ち、積極的に参加する教員の増加を図るための手立てを講じたい。なお、確立された支援体制に則り、本事業の実施に係る予算の申請・執行については、研究支援センターが、またシンポジウム開催支援及びHP等による社会への情報発信については、国際センターが担当する。</p> | <p>通年にわたる講義および年2回開催のシンポジウム活動、文系、理系の枠を超えた教員の活発な意見交換等を通じて、「生命社会学」が文理横断型の教育研究事業として確固たる基盤を構築することができたが、今後も、新しい教員の講義、シンポジウムへの参加を促進し、教員間の更なる文理連携と融合を拡大していきたいと考えている。</p> <p>授業運営 令和6年度において、生命社会学Iを遠隔授業、生命社会学IIを対面形式で実施した。受講者数は、生命社会学Iが38名(法学部2名、経済学部4名、文学部7名、理学部24名、国際社会科学部1名)、生命社会学IIが47名(法学部2名、経済学部5名、文学部7名、理学部28名、国際社会科学部5名)であった。これらの講義を行うことにより、文理混合のグループディスカッションが定着し、活発な意見交換を行うことが出来た。</p> <p>シンポジウム開催 令和6年6月8日に「災害とメンタルヘルス」をテーマとしたシンポジウムを開催し、医療政策、被災地支援NPO、精神医学、心理学の分野から計4名の講師を招いた。参加者は対面46名、Zoom112名の計158名に上り、関東以外からのオンライン参加も多く見られ、ハイブリッド開催の利点を活かして生命社会学の成果を広く社会に還元した。また、12月14日には「アンチエイジングの時代における老いとは」をテーマに、生命科学および倫理学の専門家4名を迎えたシンポジウムの開催予定である。現在、大学HPにて告知および参加登録を行っており、多様な分野からの参加を予定している。</p> <p>運営および支援体制 シンポジウムの円滑な運営を図るため、テーマ設定や総合討論準備を目的とした会議を5回開催し、文理の教員、寄附講座教員、研究員が集まり、近年の新たな社会問題について議論した。また、これまでのシンポジウムをまとめた叢書『生命科学と社会問題の多面的議論』は、令和5年12月に予定通り刊行し、学内外の関係機関に配布した。</p> <p>プロジェクトの支援体制 本プロジェクトにおいては、シンポジウム開催支援やHPを通じた社会への情報発信を国際センターが、予算執行を研究支援センターが担当した。</p> <p>★進捗段階:「実施展開」</p> |
|-----------------------------|--|---|

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

| | | |
|---------------------------|--|---|
| <p>(2025年度) 令和7年度</p> | <p>令和7年度は、令和6年度に査定された予算に基づき、生命社会学における文理横断型の教育研究事業のさらなる支援を行う。令和7年度も引き続き、文理融合の視点を活かし、多様な学生および研究者に対し、「生命と社会の相互作用」を考察する機会を提供する。また、さらに多様な専門領域の教員とのコラボレーションを推進し、社会的課題に応える教育カリキュラムの拡充および新たなシンポジウムテーマの設定も検討する予定である。</p> <p>シンポジウム開催計画 令和7年度も年2回の対面形式のシンポジウム開催を予定している。対面に加えて、全国からの参加が可能なハイブリッド形式をさらに活用する方針である。これにより、生命社会学の成果を社会に一層還元し、各領域の参加者が最新の知見や議論に触れる機会を創出することを目指す。</p> <p>支援体制および担当機関 本事業の実施に関しては、これまでに確立された支援体制に基づき、研究支援センターが予算の申請および執行を担当する。また、シンポジウム開催支援および大学ホームページ等を通じた社会への情報発信については、国際センターが担当し、円滑な事業運営を図る。</p> | <p>本プロジェクトでは、通年にわたる講義および年2回のシンポジウム開催、さらに文理の枠を超えた教員間の活発な意見交換を通じて、「生命社会学」が文理横断型の教育研究事業として確固たる基盤を構築することができた。今後は、新たな教員による講義開講およびシンポジウムへの参加を促進し、教員間の一層の連携と融合を推進していく予定である。</p> <p>授業運営 令和7年度においては、「生命社会学I」を遠隔授業として、実施した。受講者数は、「生命社会学I」が38名(法学部0名、経済学部1名、文学部5名、理学部30名、国際社会科学部2名)であった。講義では、文理混成によるグループディスカッションが定着し、学生間で活発な意見交換が行われた。特に、理系学生による科学的視点と文系学生による社会的・倫理的視点の融合が見られ、「生命社会学」教育の目的である文理統合的思考の涵養に寄与した。</p> <p>シンポジウム開催 令和7年6月28日(土)、大学東1号館イベントスペースにて、第16回学習院大学ブランディング・シンポジウム(第36回生命科学シンポジウム)が、対面とZoom(ウェビナー)を併用したハイブリッド形式で開催された。本シンポジウムは、「超高齢社会への新たなチャレンジー文理連携型(生命社会学)によるアプローチ」という本学独自のブランディング事業の10年目の成果として開催され、「超高齢社会を考えるIX(見えない世界と未来をつなぐ知の交差点)」をテーマに、計225名(対面70名、Zoom155名、一般教養科目「生命社会学」受講生34名を含む)が参加した。東1号館イベントスペースでの開催は今回で3回目となり、今回は最後列に席を追加するほどの盛況だった。参加者の年齢層は10代から80代までと幅広く、兵庫県、岐阜県、栃木県といった遠方からの来場も見られた。さらに、令和7年11月22日(土)には、第17回学習院大学ブランディング・シンポジウム(第37回生命科学シンポジウム)「超高齢社会を考えるXー人生100年時代を支える科学と思想:健康・生と死・新たな生き方ー」の開催を予定し、多様な分野からの参加が見込まれている。</p> <p>運営および支援体制 シンポジウムの円滑な運営を図るため、テーマ設定や総合討論の準備を目的とした会議を年間5回開催した。会議には文理両系の教員、研究員が参加し、近年顕在化する社会課題について多角的な議論を行った。</p> <p>プロジェクト支援体制 本プロジェクトの運営においては、国際センターがシンポジウム開催支援および大学ホームページを通じた社会への情報発信を担当し、研究支援センターが予算執行を担当した。これにより、教育・研究・社会連携が一体となった文理融合型プロジェクトとして、継続的な運営体制を確立している。</p> <p>★進捗段階:「実施展開」</p> |
|---------------------------|--|---|

(様式2) 実施計画書 兼 報告書

| | | |
|--|--|--|
| <p>（ 2026 令和8 年度 ）</p> | <p>令和8年度は、令和7年度までに培われた成果及び運営体制を踏まえ、文理横断型教育研究事業としての「生命社会学」をさらに発展させることを目指す。多様な学問領域の教員及び学生の参画を促進し、「生命と社会の相互作用」を多面的に考察する教育・研究活動を継続的に展開する。特に、社会的課題の解決に資する文理融合のアプローチを強化し、教育カリキュラムの一層の充実を図るとともに、新たな専門分野間連携の促進を通じて、知の統合を深化させる。</p> <p>シンポジウム開催計画 令和8年度も、例年通り年2回のシンポジウムを開催する予定である。対面形式を基本としつつ、全国からの参加を可能とするハイブリッド形式を積極的に活用し、より多様な分野・地域からの参画を促進する。これにより、生命社会学に関する最新の研究成果や社会的課題への新たな視点を共有し、教育研究成果の社会還元を一層推進する。また、時代的要請に即した新たなテーマ設定を行い、科学技術・医療・倫理・文化など多様な領域を横断する討論の場を創出することを目指す。</p> <p>支援体制及び担当機関 本事業の運営にあたっては、これまでに確立された体制を継続する。研究支援センターが予算の申請及び執行を担当し、国際センターがシンポジウム開催支援及び大学ホームページ等を通じた社会への情報発信を担う。これにより、教育・研究・社会連携が一体となった円滑な事業運営を維持するとともに、文理連携による学際的教育研究のさらなる発展を図る。</p> | |
|--|--|--|